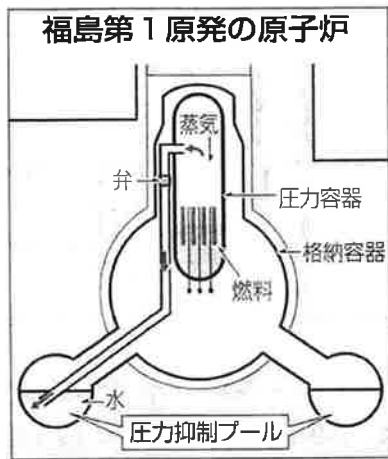
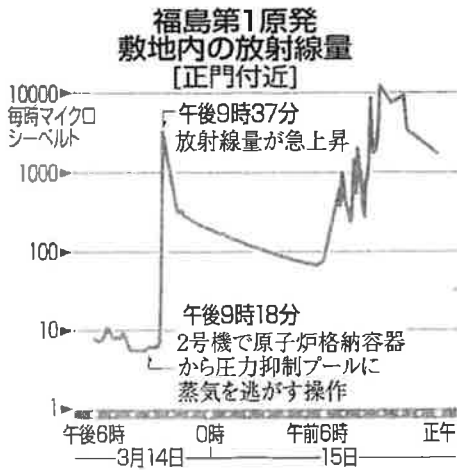


甲第 94号証

# 福島2号機揺れで損傷か

## 震災4日目 外部で線量急増 蒸気操作

専門家解析



東京電力福島第1原子炉格納容器下部の圧力抑制プールが地震の揺れで早期に損傷したか、劣化した可能性が高いと、原子力安全の専門家

東電は、地震による原子炉の明らかな損傷はなく、津波による電源喪失が事故原因との立場。揺れで損傷して

東電は、地震による原子炉の明らかな損傷はなく、津波による電源喪失が事故原因との立場。揺れで損傷して

適用されている他の原子炉への影響も必至だ。東電や政府の事故調査・検証委員会の調査結果が注目される。

解析したのは日本原子力研究開発機構の元研究者で、社会技術シ

田辺氏によると、福島第1原発では地震3日後の3月14日午後9時半すぎ、原発敷地境界の放射線量が急上昇した。2号機では直前

田辺氏によると、福島第1原発では地震3日後の3月14日午後9時半すぎ、原発敷地境界の放射線量が急上昇した。2号機では直前

福島第1原発の原子炉

沸騰水型の原子炉で、原子炉格納容器の下部につながらず、ドーナツ形のプール。常時大量の水をためておき、事故で格納容器内に蒸気がたまった場合、蒸気をプールの水に吹き込んで水に戻し、圧力を下げる。そのため、事故時に原子炉を冷やす緊急炉心冷却装置(ECCS)の水源にもなっている。

2号機は当初、津波による電源喪失で溶け落ちた燃料が格納容器に達し、15日朝、その熱と圧力によって圧力抑制プールが破損したと考えられていた。しかし、それに先立つ14日の夜、圧力容器から

含む蒸気を圧力抑制プールに逃がす操作をしていた。この前後に他号機では放射性物質放出につながる出来事や操作は見当たらなかった。

田辺氏は「圧力抑制プールには接合部や保守点検で人が入るため

蒸気を抜くという想定内の作業をしただけで周辺の放射線量が高まったことは、早い段階で既に同プールに損傷があった可能性をうかがわせる。

田辺氏は「圧力抑制プールには接合部や保守点検で人が入るため

傷が疑われたのは、原子炉格納容器と一体化して閉じ込め機能を担う圧力抑制プール。ここに高圧の蒸気が送り込まれた直後に、周辺の放射線量が急上昇したことが示された。原子炉のさまざまな設備、機器は複雑な構造をしていて、壁を貫通する部分も多い。どのような揺れに影響を受けるかを調べ尽くすのは容易ではない。だからこそ、壊れた可能性は最大限に考える必要がある。

この開口部など、弱い部分がある。地震の揺れで破損したか、少量の上昇原因についても調査中。ただ、地震後のプールの圧力などに異常は認められておらず、耐震性に問題があったとは考えていない」と反論している。

今回の解析結果で損傷が疑われたのは、原子炉格納容器と一体化して閉じ込め機能を担う圧力抑制プール。ここに高圧の蒸気が送り込まれた直後に、周辺の放射線量が急上昇したことが示された。原子炉のさまざまな設備、機器は複雑な構造をしていて、壁を貫通する部分も多い。どのような揺れに影響を受けるかを調べ尽くすのは容易ではない。だからこそ、壊れた可能性は最大限に考える必要がある。

この20年ほど、日本の原発の安全対策は欧米に大きく遅れたといわれる。さらに、欧米ではまれな地震多発地帯での立地を考えれば、東電や経済産業省原子力安全・保安院が地震による損傷を否定する姿勢は理解できない。安全に対して後ろ向きと言われても仕方がない態度で、より安全側に立った徹底的な解析が望まれる。

この20年ほど、日本の原発の安全対策は欧米に大きく遅れたといわれる。さらに、欧米ではまれな地震多発地帯での立地を考えれば、東電や経済産業省原子力安全・保安院が地震による損傷を否定する姿勢は理解できない。安全に対して後ろ向きと言われても仕方がない態度で、より安全側に立った徹底的な解析が望まれる。

## 他原発安全基準影響も

東京電力福島第1原発事故で、地震の揺れが安全上重要な機器に損傷を与えたかどうかをはつきりさせるには、廃炉の過程で実物を調べることができないが、専門家が一定の根拠をもって疑いを指摘していることは重要だ。津波以外にも事故原因が浮上すれば、他の原発を動かしているかどうかの判断にも大きく影響するから。

今回の解析結果で損傷が疑われたのは、原子炉格納容器と一体化して閉じ込め機能を担う圧力抑制プール。ここに高圧の蒸気が送り込まれた直後に、周辺の放射線量が急上昇したことが示された。原子炉のさまざまな設備、機器は複雑な構造をしていて、壁を貫通する部分も多い。どのような揺れに影響を受けるかを調べ尽くすのは容易ではない。だからこそ、壊れた可能性は最大限に考える必要がある。